

十 全 會 雜 誌

第42卷 第1號 (第377號)

昭和12年1月1日發行

原 蒼

一部ニ扁平上皮細胞癌性變化ヲ 呈セル實質性甲狀腺腫ニ就テ

金澤醫科大學病理學教室(主任中村教授)

助 手 中 谷 恒 臧

(昭和11年8月31日受附)

目 次

緒 論	7 卵 巢
第1章 實驗例	第2章 考 按
第1節 病歴、臨床上所見並診斷	第1節 甲狀腺扁平上皮細胞癌發生ニ 關スル考察
第2節 病理解剖上所見並診斷	第2節 本例ニ於ケル他ノ内分泌臟器 ノ態度
第3節 主ナル部ノ病理組織的所見	第3節 惡性甲狀腺腫ノ個體ニ及ボス 影響
1 甲狀腺	第3章 結 論
2 甲狀腺所見ノ概括	文 獻
3 甲狀腺右葉右下方ニ認メタル腫 瘤	附 圖
4 氣管壁	
5 腦下垂體	
6 副 腎	

緒 論

甲狀腺ニ發生スル 惡性腫瘍ノ大部分ハ 上皮性ノモノニシテ、肉腫ハ稀ニ 觀ラル、モノナリ。而シテ此ノ 惡性上皮性甲狀腺腫ニ於ケル組織像ハ甚ダ多様ニシテ、之ヲ分類、判定スルハ甚ダ困難ナルモノナリ。從ツテ多數ノ學者ニヨリテ種々ナル見地ヨリ種々ニ分類、命名セラレ居ルモノナリ。Langhans⁽²⁶⁾ (1907) ノ如キハ之ヲ分類シテ 1, Die wuchernde Struma 2, Karzinomatöse Struma mit dem gewöhnlichen unregelmässigen Bau der Krebse 3, Metastasierende Kolloidstruma 4, Parastruma (Kocher) 5, Kleinalveoläre gross-

zellige Struma 6, Papillom 7, Kankroid トナセリ. 又 A. Kocher⁽²⁰⁾(1919) ハ
 1, Das eigentliche Carcinom 2, Die wuchernde Struma (Langhans) 3, Das ma-
 ligne Papillom 4, Metastasierende Kolloidstruma 5, Cancroidstruma 及び混合腫瘍ト
 ナセリ. Wegelin⁽³⁶⁾(1926)ハ 1, Das metastasierende Adenom 2, Wuchernde Struma
 (Langhans) 3, Das Papillom 4, Das Karzinom (Krebsige Struma, Langhans) a,
 Das Carcinoma solidum b, Der Zylinderzellenkrebs c, Der Plattenepithelkrebs 5,
 Die Parastruma maligna (Langhans) ト分類セリ. 即チ其ノ種類多キヲ察知シ得ベシ.

而シテ以上ノ如キ分類ニヨリテ種々ナル例證ノ發表セラレタルモノ亦多數ナリ. 然レドモ
 此ノ中扁平上皮細胞癌ニ屬スルモノハ著シク稀ナルモノトセラル.

余ハ我が病理學教室ニ於テ之ニ屬スル一剖檢例ヲ檢索スル機會ヲ得タレバ, 茲ニ其ノ病理
 解剖學的並ニ組織學的變化ヲ記載シ, 諸賢ノ批判ヲ乞ハント欲ス.

第1章 實 驗 例

年齢70歳, 絲織ヲ業トシ某慈善院ニ收容セラレ居タル女性ニシテ, 死ノ數時間前本學耳鼻咽喉科ニ入
 院シ, 昭和10年10月26日午後7時50分死亡, 翌日午前10時當病理學教室ニ於テ剖檢セリ(剖檢番號2164).

第1節 病歴, 臨床上所見並診斷

慈善院ニ收容セラレ居タル老人ニシテ, 其病歴ニ詳細ヲ缺クハ遺憾ナリ. 以前ヨリ前頸部ニ腫瘤アリシ
 モ, Basedow 氏病ノ症狀ハナカリシト言フ. 約10日前ヨリ呼吸困難起リ, 此時分ヨリ此ノ前頸部ノ腫瘤
 ガ内方ニ腫脹セル如キ感アリシト言フ. 嚥下運動ニハ異常ナク, 疼痛モナシ. 呼吸困難ヲ主訴トシテ26日
 午後4時頃耳鼻咽喉科ニ入院ス. 當時所見トシテ聲帶, 氣管粘膜共ニ僅カニ赤ク, 聲帶ノ運動ハ良好, 呼
 吸困難ハ安静ヲ保ツコトニヨリ幾分軽減スルヲ認ム. カクテ同日午後6時頃夕食後便所ニ往キ, 突然身體
 ノ平衡ヲ失ヒ倒レタルマ、意識ヲ失ヒ, 呼吸困難及ビ心臓麻痺ノ爲遂ニ死亡ス.

臨床上診斷 甲状腺腫

本項ノ記載ヲ許サレタル耳鼻咽喉科松田教授ニ感謝ス.

第2節 病理解剖上所見並診斷

本項ニハ關係アル主要ナル點ノミヲ記ス.

身長 138cm, 體重 30.8kg, 體形小, 榮養衰へ羸瘦セル女屍. 四肢ノ爪甲ハ帶紫色ヲ呈シ, 何處ニモ浮
 腫ハ認メズ. 前頸部手拳大ノ部瀰漫性ニ腫脹セルヲ認ム. 腹腔内ニハ著變アルヲ觀ザルモ, 横隔膜高サハ
 左側第5肋骨上縁, 右側ハ第3肋骨下縁ニ當レリ, 腔内ニ異常ノ内容物ヲ認メズ.

前縦隔ニ於テ淋巴腺ノ腫大セルモノヲ認メズ.

胸腔 肋膜ハ左右共ニ殆ド全面ニ互リ纖維性ノ癒着ヲ營ミ, ソノ大部分ハ手ヲ以テ剝離シ得.

胸腺 殆ド脂肪織化セリ.

心臓 重量 250g, 大サ死者ノ手拳ニ比シ約1倍半, 冠狀動脈稍蛇行狀ヲ呈スルヲ認メ, 筋肉色褐ヲ帶
 ビ溷濁セル以外著シキ變化アルヲ認メズ.

肺臓 左右共ニ其ノ邊緣ノ部ハ丸味ヲ帶ビ氣泡擴ガリ, ソノ部ノ炭粉沈着ノ度ハ不平等ナリ, 下葉ハ割
 面ニ於テ暗赤色ヲ呈シ, 指壓ニヨリテ暗赤色ノ泡沫ヲ含ム液ヲ稍多量ニ出セリ. 其他氣管枝, 血管, 肺門

部淋巴腺ニ於テハ著變ヲ認メズ。

頸部臓器 氣管粘膜面ハ一般ニ平滑、色淡紅ナルモ、聲帶ヨリ約3.5cm下ノ部ニ於テソノ右側拇指頭面大ノ部外ヨリ壓迫セラレ爲ニ氣管ノ腔ハ狹ク、ソノ形稍劍鞘狀ヲ呈ス。ソノ部ノ粘膜面ヲ精査スルモ特ニ物質缺損等ハ認メラズ。其他ノ部ニハ著變ヲ認メズ。

甲状腺 氣道ト連續ノ儘ニテ検査ス（從ツテ重量ハ計ラズ）。大サ左右共ニ著シク大ニシテ左葉11.5×2.5×約2cm、右葉9.2×3.3×約3cm、峽部幅3.5cm、錐體突起長サ6.5cm。而シテ錐體突起ハ略舌骨ニ迄接ス。硬度ハ常ニ比シ稍鞏ニ觸ル、モ一般ニ平等ナリ。剖面左葉ニ於テハ僅カニ膠樣ノ性アルヲ認メ、上部ニ蠶豆大ノ限局セル灰白色膠樣ノ性ニ乏シキ竈ヲ認メシム。右葉剖面ニ於テハ左ニ比シ尙膠樣ノ性少シ。而シテ右葉下部ニ當リ、ソノ後方ニ向ヒ腫大セル部ハ前記氣管ヲ壓迫セル部ニ當レリ。又右葉後下部ニ當リ拇指頭大ノ隆起ヲ認メ、ソノ剖面灰白色ヲ呈シ稍限局セル竈ヲ形成ス。右葉右側下方ニ當リ、甲状腺及ビ上記ノ隆起ヨリ僅カニ離レテ小鶏卵大ノ略球形ノ腫瘤存シ、ソノ硬度ハ鞏ナルモ甲状腺ノ部ニ比シテハ軟ナリ、割ヲ施スニ灰白色ヲ呈シソノ中心部ハ軟解セリ。

脾臓 重量 110gr、大サ 11×7×1.8cm

腎臓 左ハ重量 118gr、大サ 12×6×2.5cm、右ハ 114gr、大サ 11×6×3.5cm、左右共ニ被膜ノ剝離稍困難、外ヨリ見テ蠶豆大乃至米粒大ノ囊胞多數ニ認メラレ、又可ナリニ大ナル陷凹ノ存在ヲ認メシム、剖面平滑。暗赤、皮髓兩質ノ境界分明。

副腎 左ハ重量 2.7gr、大サ 5×1.2×0.5cm、右ハ計ラズ。何レモ限局性病竈ヲ認メズ。

骨盤腔諸臓器 子宮腔ノ長サ4cm、其他ニ著變ナシ。（顯微鏡的ニハ子宮筋層ニ小ナル筋腫結節アルヲ認ム。）卵巢ハ左右共ニ著シク萎縮シテ存シ、中右ノモノニ於テハ小豆大ノ囊胞數個存スルヲ認メシム。

肝臓 重量 964gr。

膽嚢 粘膜面ニ異常ヲ認メザルモ、内ニ大豆大深綠色ノ結石1個ヲ容ル。

脾臓 全長 15cm、著變ヲ認メシメズ。

胃及ビ腸 胃ハ食物ヲ混ヘタル内容物ヲ多量ニ容レ、腸ニ於テ雄蛔蟲1條ヲ容レタル以外著變ヲ認メシメズ。

大動脈 幅ハ胸部ニ於テ6cm、腹部ニ於テ5cm、分岐部ノ上ニ於テ3.5cm、内面ハ一般ニ粗糙ニシテ灰白黄色ノ肥厚斑多數ニ認メラレ、又石灰化セルモノヲモ認メラル。

腦 重量 1152gr、腦廻轉ハ常ニ比シ狹キ感アル以外著變アルヲ認メズ。

腦下垂體 重量 0.5gr。

主ナル病理解剖上診斷 實質性一部癌腫性甲状腺腫 頸部淋巴腺轉移性癌 壓迫ニヨル氣管狹窄 肺氣腫 卵巢囊胞 腎囊胞 肺臟鬱血、出血及水腫 子宮筋腫 動脈硬化症 蛔蟲寄生 膽嚢内結石 萎縮腎（輕度）。

第3節 主ナル部ノ病理組織的所見

一々臓器ニ就テノ組織所見ヲ記載スルヲ省キ、甲状腺及其附近組織及ビ内分泌臓器ノ「フォルマリン固定ヲ施セルモノニ就キ「チェロイゲン包埋載片ヲ製シ、「ヘマトキシリン」—「エオジン」染色、van Gieson氏染色、格子狀纖維染色ヲ施シタル標本ニ就テ得タル所見ヲ記載スルニ止メン。

1 甲 状 腺

左右兩葉及峽部ヨリ得タル數個ノ切片ヨリ其ノ所見ヲ概括的ニ記載セバ次ノ如シ。

間質 葉間結締織ノ發育一般ニ高度ニシテ實質ヲ葉狀ニ分割スル如ク弱ク索狀ニ走行セリ。特ニ前記肉眼的ニ左葉上部ニ於テ灰白色限局セル竈トシテ認メラレシ部ニ於テハ結締織強ク發育シテソノ周圍組織トハ明カニ境界セラル。小葉内結締織ハソノ場所ニヨリテ發育度強キモノ或ハ比較的弱キモノアルモ一般ニハヨク發育セリ。間質ニハ多數ノ淋巴細胞及ビ一部少數ノ「プラズマ細胞ガ比較的瀰漫性ニ浸潤シ、又甚ダ多數ノ場所ニ於テ此等ノ細胞ガ特ニ多數集合シテ限局セル竈ヲ形成シ、此等ノ部ニ於テハ間質部ノ毛細管ニヨリ濾胞ハ境界セラル、モ、ソノ狀明瞭ヲ缺クモノ多シ。又一部ニ於テハ此等ノ細胞ノ餘リニ多數限局シテ集合セル爲淋巴裝置ヲ見ル如キ像ヲ呈スルモノアリ。然レドモ何レノ部ニ於テモ胚中心ノ存在ヲ認ムルコトヲ得ズ。

一部ノ標本ニ於テハ葉間ニ内被細胞ヲ以テ被ハル、小靜脈ノ腔擴大シ、「エオジン」ニ淡染スル同質性ノ「コロイド」様觀アル物質ヲ容ル、モノヲ所々ニ觀ル。動脈ニハ特殊ナル變化ヲ認メズ、ソノ充盈度ハ一般ニ弱シ。

實質 常態甲狀腺ニ於テ觀ル如キ類圓形ニシテ膠樣質ヲ充滿セル濾胞ノ集合セル如キ組織像ヲ呈スル部ノ認メラル、コト甚ダ少ク、之ニ反シ本例ニテハ一般ニ著シク小ナル濾胞ヨリ成リ、ソノ形ハ一般ニハ類圓形ニシテ各濾胞ヲ被覆セル上皮細胞相互ノ間ニ於テモ、シバシバ其ノ形、核ノ形或ハ大サニ相違ヲ認メ、細胞ノ形ニハ殆ド一定セル所ナク類圓形ノモノ、短圓柱狀ヲ呈スルモノ、骰子形ヲ呈スルモノアリ。一般ニハ大形ノモノ多ク「エオジン」ニハ淡明ニ染色セラル。核ハ形圓ク稍大ニシテ比較的「クロマチン」ノ少キモノ多キモノ、又不整形ヲ呈シテ大ナルモノアリ、時ニ圓ク小ニシテ或ハ不整形ニシテ「ヘマトキシリン」ニ濃染スル性質アルモノアリ。明カナル核分割像ハ認メラレズ。而シテ此等ノ濾胞ハ一般ニ腔ノ形成不完全ナルモノ多クシテ、全ク腔ノ形成ヲ認メズシテ數個ノ上記セル如キ上皮細胞ノ集リヨリ成ルカ、或ハ僅カニ腔形成ノ傾向ヲ有シ、時ニソノ腔内ニ剝離セル上皮細胞ノ1—2個ヲ容ル、アリ。腔ヲ形成セルモノニ於テハ内ニ「エオジン」ニ淡染スル液性物質ト空腔及ビ剝離セル上皮細胞ヲ容ル、カ、或ハ全ク液狀内容認メラレズ。「エオジン」ニ紅染スル如キ濃厚ナル膠樣質ヲ容ル、モノハ認メラレズ。而シテ此等腔ヲ形成セル濾胞ト雖モ、ソノ濾胞ノ大サハ著シク小ニシテ、大ナルモノ少ク、又上皮細胞ハ圓柱狀乃至骰子形ヲ呈ス。尙此等種々ナル形ノ濾胞ハ雜多ニ相集ルコトナク、各互ニ似タル性状ヲ有スルモノ相集リテ群ヲナス傾向アリ。

以上ノ如ク一般ニ實質ヲ形成スル濾胞及ビソノ上皮細胞等ハ普通ニハ觀ザル形ノモノナルモ、ソレ等ノ間ニ混リテ濾胞上皮細胞ガ短圓柱狀乃至低キ骰子形ヲ呈シ、同一濾胞ヲ被覆スル上皮細胞相互ノ間ニ著シキ形態ノ相違ヲ示サズ、且ツ腔ヲ圍ミ内ニ「エオジン」ニ染色スル膠樣質ヲ容ル、正常甲狀腺ニ於ケル濾胞ニ近キモノヲ認ムルコトヲ得。而シテ此等正常ニ近キ形ノ濾胞ハ何レモ稍集簇シテ所々ニ認メラレ濾胞ハ小圓形ノモノ多クシテ大ナル濾胞ヲ形成セルモノナク、上皮細胞ノ形ハ濾胞ニヨリ、又内容ニヨリ種々ナルモ著シク扁平化セル上皮細胞ヲ見ルハ稀ナリ。

左葉ヨリノ標本ノ一部ニ於テ濾胞中ニ小ナル「エオジン」ニヨリ染色セラレタル八面體ヲナセル結晶體ヲ極メテ少數ニ認ムルコトヲ得。又右葉中央部ニ胸腺ノ Hassall 氏小體ト認ムベキモノ1個存シ、ソノ周圍ニハ淋巴細胞多少集積セルヲ觀ル。

甲狀腺右葉後下部ニ於テ拇指頭大ノ隆起トシテ認メラレタル部ニ於テ、周圍及其ヨリ續キテ結締織ノ増殖ヲ認メシメ、内ニ特殊ナル細胞ヨリ成ル竈ヲ形成セルモノノ數個集リタル像ヲ見ル。即チコノ細胞ハ一般ニ大サ大ニシテ類圓形乃至不整形ヲナセル互ニ甚ダ不規則ノ形ヲ呈シ、所ニ依リテハ細胞ノ境界稍分明ヲ缺ク、又稀ニ數個ノ核ヲ有スル大ナル細胞ニシテ所謂巨細胞ト觀ルベキモノアリ。核モ一般

ニ不整形ニシテ細胞體ニ比シ比較的大キク、「クロマチン」ニ富ム。シバシバ間接核分割ノ像ヲ觀ルコトヲ得。而シテ此等ノ細胞ハ互ニソノ大サ、核ノ形等ニ於テ甚ダ不同ヲ示セリ。ソレ等ノ細胞ノ排列ハ著シク不規則ニシテ多數ガ相集リテ不整形ノ胞巢ヲ形成シ、且ツ其ノ周圍部ニ浸潤性ニ索狀ヲナシテ強ク發育セルノ像ヲ觀ル。各胞巢間質ノ結締織ハ可ナリニ發育シ、其ノ間ニ淋巴細胞、「プラスマ細胞及ビ「エオジン嗜好性細胞ノ多數ニ存スルヲ觀、而シテ胞巢ハ腔ヲ形成スルノ傾向ヲ缺キテ全クカ、ル特殊ノ細胞ニヨリ充實セラル、モ、或モノニ於テハ其ノ周邊部ノ間質ニ接スル細胞ハ多少圓柱狀ヲ呈シテ並ビ腔ヲ形成スルノ傾向ヲ示セリ。又胞巢ノ中心部ニ葱根横断面ノ如ク同心性ニ重疊セル有核扁平上皮細胞、或ハ全ク角化シテ「エオジン」ニ紅染セル細胞ノ集マリテ成レル所謂癌眞珠ノ形成アルヲ認ム。然レドモ何處ニモ細胞間橋ノ存在ヲ認メ得ルモノナシ。又大ナル胞巢ノ中央部全ク核ノ被染色性ヲ失ヒ、僅カニ細胞様有形成分ノ存在セルヲ認メ得ルモノ或ハ全ク塊狀ヲ呈スル部アリ、即チ胞巢ノ中央部ニ壞死ニ陥レル像ヲ呈スルモノヲ觀ル。

該竈ノ周邊部ニ於ケル甲狀腺實質ハ、ソノ上皮細胞ハ一般ニ著シク異型ヲ現シ、腔ヲ形成セザル單ナル細胞群ヲナシ或ハ腔ヲ形成セルモノアリテ、核、細胞ノ形、大サニ於テモ著シク不同ヲ示セリ。此ノ部間質結締織ニ富ミ淋巴細胞、「プラスマ細胞、又一部「エオジン嗜好性細胞ノ集積多キヲ觀ル。

2 甲狀腺所見ノ概括

上記セル甲狀腺ノ肉眼的並ニ顯微鏡の所見ニ基キ之ヲ概括考察セントス。

甲狀腺ハ氣道ト共ニ剔出セラレシ故重量ヲ計ラザリシモ、大サハ左葉ハ 11.5×2.5×約2cm、右葉ハ 9.2×3.5×約3cm ニシテ普通ニ見ル甲狀腺ニ比シ著シク大ナリ。而シテソノ組織像ヲ觀ルニ、普通甲狀腺ハ觀ザル大型、不規則ノ細胞ヨリ成ル小濾胞性ノモノ多ク、又膠樣質ヲ容ル、コト少ク且ツ一般ニ薄シ。僅カニ散在性ニ尋常甲狀腺ニ於テ觀ル如キ膠樣質ヲ充滿セル濾胞ノ存スル部ヲ認ムルニ過ギズ。即チ甲狀腺ニ變化起リテ、其ノ大部分ガ前者ノ如キ細胞ニ置換ラレ、常態ニ近キ實質組織ハ所々散在性ニ僅カニ殘リテ觀ラル、モノナリ。間質ニ於テハ Basedow 氏病或ハ惡性甲狀腺腫等ニ於テシバシバ認メラル、如キ淋巴細胞ノ強キ集積ヲ觀ル。且ツ此ノ集積竈ハ一般ニハ淋巴細胞ヨリ成ルモ、實質細胞ノ強ク異型ヲ現セル部ニ於テハ「プラスマ細胞ヲ混ズルコト多ク、特ニ癌ヲ形成セル部ニ於テハ「プラスマ細胞ヲ多數ニ認メラレ、他ノ部ニ於ケル淋巴細胞集積竈トハ少シク異レル像ヲ呈セリ。

上述ノ如ク肥大セル甲狀腺全體ノ組織像ハ所謂實質性甲狀腺腫ニ一致セルモノト認ムベク、而シテカクノ如ク著シク變化ヲ示セル甲狀腺ニ於テ、其ノ右葉後下部ニ當リ特ニ 1 個ノ隆起セル部ヲ作り、組織的ニ此ノ部ニハ著シク異型ヲ示セル實質細胞ヨリナル腺質ヲ僅カニ認メシムル以外大部分ハ特殊ナル細胞ヨリ成ル。即チ所謂癌眞珠ヲ伴ヘル扁平上皮細胞癌ヲ形成シ、ソノ周圍ニ向ヒ強ク浸潤性發育ノ狀ヲ現セリ。即チ甲狀腺ノ一部ニ於テ扁平上皮細胞癌アリ、他ノ大部分ニ於テハ實質性甲狀腺腫ノ像ヲ呈スルモノナリ。又迷入セル組織トシテ胸腺組織ヲ右葉ノ一部ニ於テ認メタリ。

3 甲狀腺右葉右下方ニ認メタル腫瘤

組織像ハ上記甲狀腺右葉後下部ニ於テ觀タル隆起ノ部ト略同様ノ像ヲ呈シ、中心部ニ軟化セル竈アルヲ認メタルモノナリ、之ニ一致シテ中心部ニ於テハ可ナリ大ナル竈ヲ形成シテ内ニ全ク核ノ被染色性ヲ失ヒ僅カニ細胞様有形成分ヲ混ジタル塊狀物ヲ見、時ニ内ニ癌眞珠ト想像シ得ル全ク核染色ヲ失ヒタルモノヲ交ヘタリ。ソノ腫瘤組織ニ於ケル角化傾向強ク、癌眞珠ノ數ハ遙カニ多數ヲ算シ、且ツソノ細胞ニ核ヲ缺キテ硝子様ニ觀ルモノアリ。周縁部ニ當リテハ胚中心ヲ伴ヘル淋巴腺組織ノ存スルヲ觀、明ニ癌腫ノ淋

巴腺轉移電ト觀ラル、モノナリ。

4 氣 管 壁

甲状腺ニヨリ壓迫ヲ受ケン部ヲ檢ス。

氣管粘膜、粘膜下組織及平滑筋組織ノ部ニハ多少炎性變化トシテノ細胞浸潤等觀ラル、モ其ノ他ニ著シキ變化ヲ觀ズ。氣管周圍ノ結締織ノ部ニ數個ノ特殊ナル像ヲ呈スル部アリ。此ノ竈ハ何レモ前記甲状腺右葉後下部ニ認メシ隆起ニ相似ニシテ、多數ノ間接核分割ノ像ヲ伴ヒタル大形ノ細胞ガ索狀ヲナシテ浸潤性ニ外ヨリ結締織ノ間ニ進メル狀ヲ呈ス。此等ノ細胞ハ何レモ上皮性ノモノニシテ多少ノ間質結締織ヲ伴ヘリ。其周圍ニハ廣範圍ニ互リ瀰蔓性ニ多數ノ淋巴細胞、「プラスマ細胞及「エオジン嗜好性細胞ノ浸潤アルヲ觀ル。氣管粘膜ノ部ニハ同様ノ細胞ノ直接侵入セル像ハ觀ルコトヲ得ズ。

5 腦 下 垂 體

(副腎ト共ニ石本⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾氏ノ報告セル標本ヲ參考トシテ檢査シ得タリ、茲ニ同氏ノ好意ヲ謝ス。)

前葉ニ於テハ腺細胞中「エオジン嗜好性細胞ハソノ數稍多シ、然レドモ分布ノ狀態ニ特ニ變化アリトハ觀ルコトヲ得ズ。鹽基嗜好性細胞ハ其形態ニハ著シキ異常ヲ認メザルモ、細胞境界ニ不明瞭ナルモノアリ、又可ナリニ大ナル空胞ヲ有スルモノ多ク、一般ニ鹽基性色素ニ對スル被染色性弱シ。而シテソノ標本中ニ於ケル細胞數ハカナリニ少シ。「エオジン嗜好性細胞亦之ト同様ニ退行性ニ變化セルモノヲ認ムルモ鹽基嗜好性細胞ニ於ケルモノニ比シテハソノ數少シ。主細胞ニ於テハ特記スベキ像ヲ觀ズ。3種ノ細胞中主細胞數最モ多ク、鹽基嗜好性細胞最モ少シ。

而シテ又前葉ニ於ケル著シク多數ノ腺細胞巢ニ膠樣質ヲ含メル腔ヲ認メ、此等腔ハ何レモ小ク、膠樣質ハ「エオジン」ニヨリテ淡紅同質性ニ染色ス。間質結締織ハ稍増生シテ各腺細胞巢ヲ圍繞セリ。血管ノ充盈度ハ中等ナリ。中葉ニ就テハ不整圓形ヲ呈スル大小ノ囊胞數個認メラレ、ソノ上皮細胞ハ種々ナル高サノモノヨリ成リ、内容物タル膠樣質ハ「エオジン」ニ淡紅、同質性ニ染色シ、剝離セル上皮細胞ヲ認メシムル、モノ亦存ス。一部囊胞ノ相集マレル部ノ間質ニ可ナリ多數ノ淋巴細胞ノ集積セル小ナル竈アリ。

後葉ニ於テハ前方中葉ニ近キ部ニ於テ層狀ヲナシテ「ヘマトキシリン」ニ染色スル小圓形ノ結石ヲ認ムル以外他ノ細胞成分ニ變化ヲ認メズ。

6 副 腎

皮質ハ薄ク髓質ノ厚サニ著シキ變化ヲ認メズ。皮質ノ部ニ小ナル副皮質結節ノ存在ヲ認ム。

皮質細胞ニ就テハ一般ニ稍萎小ノ傾向ヲ示シ、特ニ絲絨層ニテハ強ク萎小セル細胞ヨリ成レル部アリ、一部ニハ少數ノモノニ於テ核崩壞ヲ示セルモノアリ。「アルコール」脱水セル標本ニテハ細胞體內ニ小空胞ヲ觀ル。特ニ束狀層ニ於テハ蜂巢狀ヲ呈ス。網狀層細胞ニテハ褐色色素顆粒可ナリニ多量ニ認メラル。

髓質細胞ニ於テハ著シキ變化ヲ認ムルコトヲ得ズ。

結締織纖維ハ膠基纖維、格子狀纖維共ニ、殊ニ細胞ノ萎小セル部ニ於テハ稍強キ發育ヲ示セリ。血液充盈ハ一般ニハ中等度ナルモ、一側ノ副腎ニ於テ其ノ數個所ニ、皮質ノ網狀層ヨリ束狀層ニ互リ血球ノ血管外溢出ヲ示ス小ナル竈アリ。間質ノ部ニ當リ主トシテ小圓形細胞ノ瀰蔓性ニ多數集積セル小竈アリ。カ、ルモノヲ髓質部ノ數個所ニ於テ認メ、又皮質ノ部ニ於テモ僅カニ認メ得ルモ髓質ニ於ケルモノニ比シテソノ竈小ニシテ著シキモノニハアラズ。

7 卵 巢

小ナル囊胞多數ニ存シ骰子形上皮細胞ニ被覆セラル、腔内ニ融合セザル滴狀物ヲ容ル、モノ多シ。

第 2 章 考 按

Aschoff⁽²⁾ハ我が國 = 甲状腺腫ノ稀ナルヲ記シ、之一般 = 認メラル、事實ナリ。而シテ惡性甲状腺腫ハ通常ノ甲状腺腫 = 比シ尙稀 = 見ラル、疾患ナルハ一般ノ等シク認ムルトコロナリ。惡性甲状腺腫ハカクノ如ク稀ナル疾病トセラル、モ我が國 = 於テ研究發表セラレタルハ犬塚⁽¹²⁾(18例)、神田⁽¹⁵⁾(18例)、中山⁽³⁰⁾(21例)等ノ比較的多數例 = 就テ報告セルヲ始メトシ、其他一々枚擧スル = 違アラズ。而シテ之等ノ惡性甲状腺腫トシテ發表セラレタルモノノ多クハ癌腫 = 屬スルモノナルハ論ヲ俟タズ。而シテ腺癌、髓様癌、單純癌等 = 屬スベキモノ主ニシテ、扁平上皮細胞癌ノ認メラレタルハ甚ダ稀ナリ。

今甲状腺扁平上皮細胞癌 = 關シ研究報告セラレタルモノヲ觀ル = Kaufmann⁽¹⁸⁾ = 據レバ、甲状腺扁平上皮細胞癌ヲ發見、報告セルハ Lücke⁽²⁷⁾ヲ嚆矢トスト、該例ハ1867年36歳ノ者 = 認メラレタルモノニシテ、甲状腺左側 = 腫瘤アリ、剖檢上扁平上皮細胞癌ナルヲ知ラレタリ。次 = Eppinger⁽⁷⁾(1880)ハ47歳ノ婦人 = 觀、Kaufmann⁽¹⁸⁾(1881)ハ40歳ノ土工 = 認メタリ。Wegelin⁽³⁶⁾ = 據レバ其他 = Förster, Karst, Busachi, Braun, Demme, Wolfenden, Bufnoir und Milian, Herrenschildt (2例), Schäfer, Bérard und Alamartine, Ribbert, Schmidtman, Roeder, Reinstaller, Bérard und Dunetノ報告アリト。其ノ中 Braun, Eppingerノ例 = 就テ Wegelin⁽³⁶⁾ハ其ノ甲状腺原發ナルヲ疑ヘル如シ。而シテ Wegelin⁽³⁶⁾(1926)ハ之 = Bernノ材料 = ヨル2例ヲ追加シ居レリ。其後 Krompecher⁽²⁵⁾(1925)ハ16例ノ惡性上皮性甲状腺腫瘍例中1例ヲ觀タルコトヲ記載シ、Kartagener⁽¹⁶⁾(1928)ハ Peritheliom様ノ構造ヲ呈セル1例ヲ記載セリ。我國ノ文獻 = 求ムル = 野谷⁽³¹⁾(大正3年)ハ67歳ノ婦人 = 於テ紡錘形細胞肉腫ト合併シテ觀ラレタルモノヲ詳記シ、中村修⁽²⁸⁾(昭和9年)1例ヲ觀、又塚一乃木⁽³³⁾(昭和9年)ハ45歳ノ男子 = テ患者ノ生前外科的 = 調査セル結果 „甲状腺カンクroid?“トシテ發表セリ(同一ト思ハル、例ヲ塚⁽³⁴⁾(昭和10年)ガ患者ノ死後 = 記載シ剖檢 = ヨル精細ナル檢索ヲ行ヒ得ザリシハ遺憾ナリト述ベタリ)。

以上ノ如ク甚ダ稀ナルハ事實ナルガ如シ。Wegelin⁽³⁶⁾ガ Braunノ例 = 對シ食道癌ヨリノ二次性ノモノヲ誤認シタリトナセル = 鑑ミ、今迄記載ノ諸例中之 = 類スルモノナキヲ保セス。

第 1 節 甲状腺扁平上皮細胞癌發生 = 關スル考察

甲状腺ノ上皮細胞ハ普通骰子形、或ハ扁平 = 近キ低キ一層ノ上皮細胞ニシテ、扁平上皮細胞ハ健常ナル甲状腺 = 於テハ認メラレザルモノナリ。隨テ甲状腺ヨリ扁平上皮細胞癌ノ發生ヲ説明スルニハ、一旦扁平上皮細胞 = 化生シテ後之ガ癌腫性變化ヲ起シテ生ズルカ、或ハ他ノ種類ノ癌ヲ發生シテ後之ガ扁平上皮細胞癌 = 變化セルカ、或ハ甲状腺ノ一部 = 扁平上皮細胞ヲ有スル組織ガ存在シ、ソレ = 癌腫性變化起リテ生ズルカノ場合ヲ考ヘ得ベシ。然レドモ甲状腺上皮細胞 = 於テハ扁平上皮細胞ヘノ化生ハ容易 = 起リ得ルモノニハアラザルモノノ如ク、カ、ル化生ノ後 = 癌腫性變化ノ起ルコトハ多數學者ノ認メザルトコロナリ (Wegelin⁽³⁶⁾参照)。

既存セル扁平上皮細胞ヨリノ發生方法ニ就テハ、其ノ組織ノ起源ニ就キ種々ノ胎生期ノ組織、例ヘバ Aberrierter Keim des Integuments (Ehrhardt⁽⁶⁾) 等ノ如キ、Ductus thyreoglossus ノ上皮細胞 (Th. Kocher⁽²¹⁾) 等ノ如キ、Kiemenbogen ノ上皮細胞 (Schmidtman⁽³⁵⁾) 等ノ如キ) 等ヲ假定セラレタリ。而シテ Wegelin⁽³⁶⁾ ハ Branchiogenen Ursprung ヲ以テセバ最多クノ場合ヲ説明シ易キコトヲ述ベタリ。

由來甲狀腺ニ於テ迷入セル種々ノ組織ヲ觀ルコトハ餘リ稀ナルコトニハアラズシテ、余⁽²³⁾ノ囊ニ發表セル白血病例ノ甲狀腺ニ於テモ異種ノ組織アルヲ認メ、胎生期ノ遺殘物ナラント述ベ、之ノ稀ナル所見ニハアラザルベキヲ指摘セリ。

本例ノ扁平上皮細胞癌モ此ノ如キ迷入又ハ異常組織成分アリテ、即チ Wegelin 等ノ説ケル如キ Branchiogenen Ursprung 等ヲ以テ癌ヲ發生セルモノニハアラザルカ。殊ニ余ノ例ニ於テ甲狀腺間質ノ一部ニ胸腺組織アルヲ認メタル如キ本例ニカ、ル Branchiogen ノ異種組織ガ迷入シ易キ状態ニ置カレタルコトアルヲ思ハシムルモノナレバ、此ノ方面ニ於ケル吟味モ亦必要ナリ。然レドモ何レノ組織ガ迷入セシモノナルカハ、カノ癌腫ヲ生ゼシ後ニ於テハ全ク想像ニ止ルモノニシテ、本例ニ於テ之ヲ區別スルノ根據ヲ見出シ得ザルナリ。シカノミナラズ又一方之ヲ Ductus thyreoglossus ヲヨリ發生セントスルニハ其ノ位置的關係ニ於テ多少符合セザルモノアリ。Branchiogenen Keim, Integument ノ迷入ノ可能性存在シ、之ニヨル癌發生ヲ否定シ得ザルモノアリ。然レドモ解剖學的並ニ組織學的ニ觀察スルニ本例甲狀腺ハ全體トシテ腫大シテ實質性甲狀腺腫ノ組織像ヲ示スモノニシテ、而カモ扁平上皮細胞癌ノ組織像ヲ示セル部ニテ其ノ周邊部ニ於テ多少腺癌ト認ムベキ組織構造ヲ示ス部アルコト、及ビ強ク細胞ノ異型ヲ示セル部ニ於テ特ニ「プラズマ細胞等ノ集積多ク、即チ此ノ部ニ慢性ノ炎症ノ存在ト認ムベキ所見アルヨリ推シ、迷入セル組織ニ發生ヲ求ムルヨリモ他ノ説明ノヨリ適當ナルヲ思ハシム。即チ既ニ全體ニ互リ組織ノ増生ニヨリ成レル甲狀腺腫ノ存在セルモノニアリテ、一度或ル動機ノ加ハリテ一旦此ノ部ニ癌ノ發生ヲ促シ、次ニ其ノ癌細胞ガ化生シテ扁平上皮細胞癌ニ變化セリトスル時、ヨリ多クノ點ニ於テ其ノ所見ト合致スルモノアリト考ヘラル。即チ扁平上皮細胞癌ヲ形成セル部ノミナラズ、實質性甲狀腺腫ノ像ヲ呈スル他ノ部ヲモ併セ觀察シテ、全體トシテ淋巴細胞ノ著シキ集積ヲ觀ルモ、特ニ前者ノ部ニ於ケル淋巴細胞ノ集積竈ハ著シク「プラズマ細胞ニ富ムノミナラズ、一般ニ細胞ニ強ク異型ヲ現セル部ニ於テ「プラズマ細胞ヲ多ク混ヘタル傾向アリ。即チ此ノ「プラズマ細胞ノ存在ガ慢性炎症ニ基キ起サレタルモノト做スモ不可ナカルベク、慢性炎症性變化ニヨリテ甲狀腺腫ヲナセル上皮細胞ニ異型ヲ現シ遂ニ癌腫性變化ヲ惹起スルニ到ラシメタルモノト解スルコトヲ得。一方癌腫性變化ヲ現セル竈ノ周邊部ニ於テハ癌細胞ガ多少圓柱狀ヲ呈シテ並列シ、多少腔ヲ形成スル傾向ヲ示セルモノヲ觀ル。又此ノ部ノ實質細胞ハ強ク異型ヲ示セル狀ニアリ。是ヲ以テ觀レバ甲狀腺腫アルモノニ特ニ其ノ右葉下部ニ於テ慢性炎症ノ加リテ、甲狀腺癌トシテ最モシバシバ見ラル、腺癌ヲ發生シ、連續スル刺戟ニヨリテ其ノ腺癌ヨリ化生シテ扁平上皮細胞癌ヲナシタルモノト考フルコトヲ得ベク、其ノ説明ノ迷入細胞ヲ以テノ説明ヨリモヨリ合理

性アルヲ思ハシム。

以上ヲ要約スルニ本例ニ於テハ Wegelin⁽³⁶⁾ 等ノ稱フル如キ 迷入上皮等ヨリ扁平上皮細胞癌ノ發生ヲ説明センヨリモ、實質性甲狀腺腫ノ一部ニ加レル慢性炎症ニヨリ腺腫ヲ發生シ、之ガ化生シテ扁平上皮細胞癌ヲ生ゼリトナス方、ヨリ其ノ所見ニ一致セルモノナリト思惟セラル。

上述セル如ク發生セル扁平上皮細胞癌ニ於テ、淋巴腺ニ轉移ヲ起シ、其ノ組織ハ全ク扁平上皮細胞癌ノ組織像ノミヲ示セルモノナリ。

第2節 本例ニ於ケル他ノ内分泌臟器ノ態度

本例ニ於テハ腦下垂體、副腎、卵巢ヲ検査セリ。

卵巢ハ萎小シ小囊胞認メラレタル外特記スベキモノナシ。

腦下垂體ト甲狀腺トノ關係ニ就テ

Zuckermann⁽³⁷⁾ ハ先天性甲狀腺缺損症例ニシテ臨床上先天性 Myxödem ヲ呈セルモノニ於テ、Erdheim ガ妊娠細胞ト記載セルモノニ似タル細胞ヲ多數ニ認メテ、主細胞ニ肥大、増殖ノ起ルコトヲ述べ、Berblinger⁽³⁾ モ後天性甲狀腺機能低下ノ場合腦下垂體ニ妊娠性變化ト同様ノ變化ガ現レ、主細胞ノ増加ハ甲狀腺機能低下ノ結果トシテ起ル現象ナリト述べ、Abrikossoff¹⁾ ハ Myxödem ノ際前葉ニ著シキ肥大ヲ認メ、Boyce 及 Beadles⁽⁴⁾ モ其ノ重量ノ増大ト共ニ前葉ニ充進ノ像ヲ認メタリ。然レドモ一方 Hunt⁽¹¹⁾ ハ51歳ノ例ニ於テ僅カニ増大セルモノ其ノ組織所見ハ全ク尋常ナリト言ヘリ。然ルニカ、ハル相違ハ其ノ疾患ノ經過期間、年齢、疾病ノ程度、個體ノ體質等ニ依リ異ル所見ヲ來スベク、從ツテ之等研究者ニ依リ其ノ報ズル所ニ異ルヲ見ルモノナラン。然レドモ一般ニ甲狀腺ノ機能低下ニ對シ腦下垂體ニ肥大或ハ進行性變化ヲ見ルモノト認メラル。

之ニ反シ Basedow 氏病例ニ於テハ腦下垂體ニハ概シテ Myxödem ノ例トハ反對ノ意味ヲ有スル變化ヲ示スモノニシテ、Kon⁽²²⁾ ハ2例ノ中1例ニハ明カニ腺索ノ狭小トナリ色素嗜好性細胞ノ發育悪シキヲ證明セリ。又 Kraus⁽²³⁾ ハ重量ノ減少、「エオジン嗜好性細胞數ノ種種ナル程度ノ減少、鹽基嗜好性細胞ノ變化及ビ主細胞ノ萎小等アルヲ記載セリ。又氏⁽²⁴⁾ ハ Athyrose 或ハ Hypothyrose ノ際腦下垂體ノ組織像ハ常ニ進行性、増殖性變化ニシテ其ノ増大ヲ現スニ對シ、Basedow 氏病ノ際ニハ其ノ長キ經過ノ後ニ現ル、二次性變化トシテノ退行性變化ヲ現スト言ヘリ。

余ノ例ニ於テハ中葉、後葉ノ部ニハ著シキ變化ヲ認メズ。前葉ニ於テハ其ノ主細胞ニハ著シキ變化ヲ認メザルモ、鹽基嗜好性細胞及ビ「エオジン嗜好性細胞ニ於ケル、細胞境界ノ不明瞭ナルモノアルコト、空胞形成ノ著シキコト及ビ核染色性ノ弱キ（之顆粒ノ退行性變化ニ依ルト考ヘラル）コト、及ビ腺細胞巢中ニ於ケル膠樣質ノ多キコトヲ指摘シ得ラル。此ノ色素嗜好性細胞ノ變化ハ何レモ其ノ退行性變化ト觀ルベク、アタカモ上記 Kraus⁽²³⁾ ガ Basedow 氏病例ニ於テ鹽基嗜好性細胞ニ觀タル變化ニ似テ、腦下垂體機能ノ低下或ハ異常アルモノノ如ク考ヘラル。曩ニ我が教室ニ於テ石本⁽¹³⁾ ハ54例ノ種々ノ瘤腫症例ニ於ケル腦下垂

體ノ變化ヲ詳細ニ研究發表セリ。其際鹽基嗜好性細胞ニ於テハ著シキ變化ヲ觀ザリシモ膠樣質ニ關シテ、前葉腺細胞巢内膠樣質ハ全例ニ於テ認メ之ヲ注意スベキ所見トナシ、其ノ成因ニ就テハ腺細胞分泌物輸送障礙ノ外腺細胞機能障礙ヲモ思惟スベシト記載セリ。之ニヨリテモ余ノ膠樣質多キ所見ト色素嗜好性細胞ノ退行性變化トハ共ニ其ノ機能狀態ニ何等カノ關係アルモノノ如ク、且ツ本例ニ於テハ年齡ノ關係ニ因ル一定度ノ變化以外、其ノ主ナル原因ヲ甲状腺ノ機能變化ニ關聯スル續發性ノモノト思考セラル。

副腎ニ於テモ甲状腺機能狀態トノ間ニ密接ナル關係ノ認メラル、モノニシテ、Dietrich und Siegmund⁽⁵⁾ハ其ノ著書ニ於テ甲状腺別出ニ因リ副腎ニ影響ヲ及ボシ Adrenalin 減少ニヨル血壓ノ降下ヲ來シ、甲状腺作用物質投與ニヨリテハ副腎皮質ノ肥大ト同部脂肪ノ減少ノ起ルコトヲ記セリ。人體例ニ於テ Goldzieher⁽⁸⁾ハ甲状腺機能低下ノ場合ニ副腎ニ萎縮アルヲ觀、之ニ反シ Basedow 氏病ノ際 Adrenalin 量ノ増加アルヲ證明シタリ。又 Pettavel⁽³²⁾ハ Basedow 氏病例ノ副腎ニ於テハ其ノ髓質ニ「クロマチン」ニ富メル大ナル核ヲ有スル多數ノ大型ノ細胞ヨリ成ル細胞性肥大ヲ觀タリ。Herring⁽¹⁰⁾ハ甲状腺機能亢進ノ副腎ノ大サ及ビ重量共ニ増加スルコトヲ記載セリ。一般ニ甲状腺ハ副腎ニ對シ促進的ニ作用スルモノノ如シ。

余ノ例ニ於テハ副皮質結節、出血竈、或ハ小ナル淋巴細胞浸潤竈ノ存在ヲ認メタル以外重要ナル變化ハ皮質細胞ニ於テ可ナリニ強キ種々ナル退行性變化(細胞ノ萎小、空胞ノ存在等)ト認ムベキ像ヲ觀、髓質ニ於テ著變ヲ觀ザリシコトナリ。

石本⁽¹⁴⁾ハ種々ナル癌腫症例ノ副腎ヲ詳細研究シ、皮質細胞ニ種々ノ變性像ヲ觀ルコト多シト記載セリ。其他ノ所見ニ於テモ同氏ノ記載ニ似タルトコロ多シ。

茲ニ於テ本例ハ腦下垂體ニ對シテハ退行性變化ヲ及ボシ抑制的ニ作用シタルモノノ如ク考ヘラル、所ヨリシテモ、副腎髓質ニ對シテハ促進的ニ作用シ、進行性ノ變化ヲ期待セラル。然ルニ余ノ例ニ於テ髓質ニ於テ著變ヲ觀ザルハ副腎皮質機能ノ真相ヲ明カニセザル今日云爲スベカラザルモ、皮髓ノ間ニ協同的作用ヲ營ムモノト做スベカラザル點ノ存スル以上、本例ニ於テ皮質ノ寧ろ退行性變化アルニ關聯シ、髓質ニ著變ヲ伴ハズシテ甲状腺機能ニ適應セルモノニアラザルカ。

第3節 悪性甲状腺腫ノ個體ニ及ボス影響

以上甲状腺扁平上皮細胞癌ノ1例ニ就テ詳細ニ其ノ組織像、發生等ニ關シ論述セリ。最後ニ本例ノ個體ニ及ボセシ影響ニ就テ臨床的及ビ剖檢の見地ヨリ聊カ攻究スルトコロアランドス。

本例ニ於テ個體ニ及ボセシ影響ハ之ヲ次ノ3項ニ總括シ得ベシ、即チ

- 1 甲状腺及ビ附近臟器ノ形態的變化ニヨル影響
- 2 悪性腫瘍トシテノ影響
- 3 内分泌腺ノ變化ニヨル影響

而シテ此ノ中第3ハ其ノ大約ヲ前述セリ。即チ多少ノ變化ヲ他ノ内分泌腺ニ與ヘタルモ、爲ニ個體ニ對シテ著シキ變化、影響ヲ及ボセシモノトハ做スベカラズ。

形態的變化ニヨル影響ニ就テハ甲狀腺ノ位スル頸部ニハ局所解剖學的ニ種々ナル重要器官ノ存スル處ナレバ、甲狀腺腫大、癒着ニヨリ附近臟器ニ壓迫ヲ及ボスコトアルハ考ヘ易キ所ニシテ其ノ腫大スル形、方向ニ因リテ自ラ異ル結果ヲ招來スルモノナリ。Kaufmann⁽¹⁸⁾ノ成書ニ據レバ甲狀腺腫ニ依リテ來ル最モシバシバニシテ且ツ最モ危險ナルハ氣管ノ壓迫ナリ、其他頸動脈及ビ靜脈ノ壓迫、迷走神經及ビ交感神經等ノ壓迫、食道ノ壓迫及ビ頸部筋肉ノ壓迫アルヲ擧ゲラル。惡性甲狀腺腫ニ於テハ其ノ發育速ニシテ且ツ一般ニ癒着ヲ強ク現スモノナレバ、良性ノ甲狀腺腫ニ比シ影響ハ高度ニ現ルベシ。而シテ之等ニ關スル報告多ク、各之等ノ症狀ノ幾何カラ備ヘタルモノ多シ。余ノ例ニ於テハ最モ著シキハ氣管ノ壓迫ニシテ氣管ハ爲ニ殆ド劍鞘狀ヲ呈シタリ。此ノ氣管腔ノ狹窄ニヨリ呼吸困難ヲ來シタルコトハ明ニシテ、之ニヨリ比較的慢性ノ窒息ヲ來シ、少クトモ間接ノ死因トナリタルハ明ナリ。其他右側橫膈膜ノ左ニ比シ著シク高位ヲ示セシハ橫膈膜神經ノ壓迫或ハ癒着ニ因ル麻痺ニ原因セルモノニハアラザルカ。然レドモシバシバ犯サルト言ハル、迴歸神經等ニハ臨床的所見ヨリシテ變化ヲ受ケザリシモノノ如シ。

惡性腫瘍トシテノ變化ハ惡液質、浸潤性發育及ビ轉移竈形成ノ3方向ニ向ツテノ影響ヲ考フベシ。惡液質ヲ診斷スルニ最モ目標トナシ得ルハ羸瘦ナリ。余ノ例ニ於テハ羸瘦可ナリニ著シキモノアリ、癌腫直接ノ影響ヲ考フベキト共ニ老年性衰弱ヲ考慮セザルベカラズ。浸潤性發育ニ因ル結果トシテシバシバ食道、氣管及ビ外皮ニ向ツテ發育シ、之ヲ破壊シ、時ニ其ノ部ニ瘻孔ヲ形成スルコトアルモ、本例ニ於テハ氣管壁ニ多少ノ浸潤ヲ觀ルモ高度ナル變化、特ニ粘膜面ニ及バル如キ變化ハ觀ザリキ。轉移ハ右側所屬淋巴腺ニ認メラレタルノミニシテ、淋巴管ヲ介シテ行ハレ、血管ヲ介シテ轉移セルモノハ何處ニモ認メラレザリキ。由來惡性甲狀腺腫ニ於テハ特ニ血管ヲ介シテ轉移スルコト比較的シバシバ認メラル、トコロニシテ、Graham⁽⁹⁾ハ惡性上皮性甲狀腺腫ハ血管、殊ニ靜脈ニ侵入シ肺臟或ハ骨組織ニ轉移スト述ベタリ。

第3章 結 論

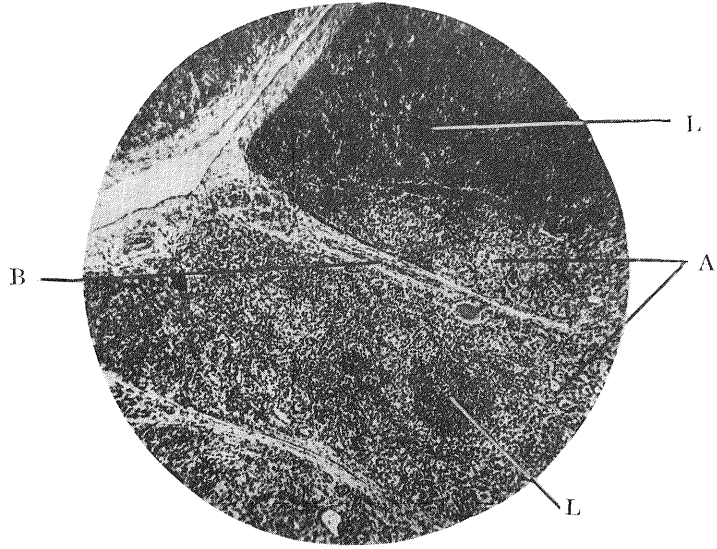
1. 本編ハ呼吸困難ヲ訴ヘタル70歳ノ婦人ニ割檢上甲狀腺ノ扁平上皮細胞癌ヲ認メタルモノノ記載ナリ。
2. 甲狀腺ニ於ケル扁平上皮細胞癌ハ甚ダ稀ナルモノニシテ、本例ニ於テハ實質性甲狀腺腫存シ、其ノ一部ニ慢性炎症ニヨル刺戟加リテ上皮細胞ヨリ腺癌ヲ、次デ其ノ化生ニヨリ扁平上皮細胞癌ヲ發生セルモノト思惟セラル。所屬淋巴腺ニ於テ扁平上皮細胞癌ノ轉移竈ヲ認メタリ。
3. 内分泌臟器トシテ甲狀腺ト平衡ヲ保ツベキ腦下垂體及ビ副腎ニ於テ各多少ノ變化アルヲ認メタリ。
4. 本例ニ於ケル癌腫ノ存在ハ其ノ腫大ニ因リテ氣管ヲ壓迫セル點ニ於テ死因ニ大ナル關係アルベキモ、其他ニハ餘リ著シキ影響ヲ及ボサザリシモノナリ。

文 獻

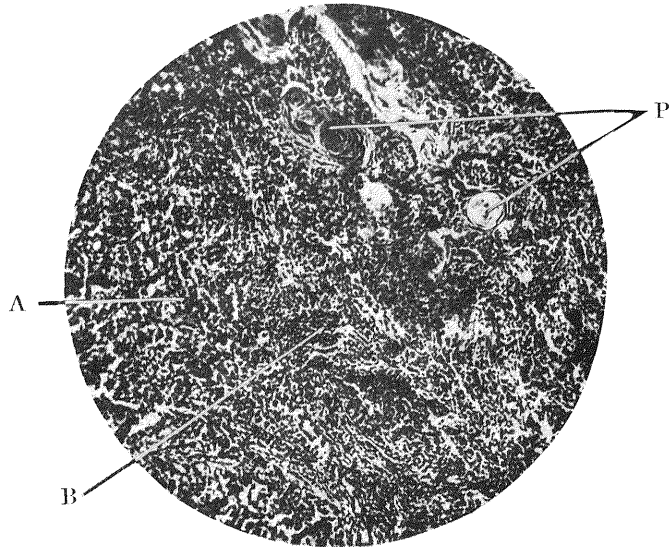
- 1) **Abrikossoff**, Anatomische Befunde in einem Fall von Myxoedem. Virchows Arch. Bd 177, S. 426, 1904. — 2) **Aschoff**, Zur Kropffrage in Japan. Virchows Arch. Bd. 254, S. 841, 1925. — 3) **Berblinger**, Die Hypophyse bei Hypothyreose, nebst Bemerkungen über die Schwangerschaftshypophyse. Mitt. a. d. Grenzgeb. d. Med. u. Chir. Bd. 33, S. 92, 1921. — 4) **Boyce** u. **Beadles**, Enlargement of the hypophysis cerebri in Myxoedema. Journ. of pathol. a. bacteriol. vol. 1, p. 223, 1893. — 5) **Dietrich** u. **Siegmund**, Die Nebenniere und das chromaffine System. Henke u. Lubarsch, Handbuch der speziellen pathologischen Anatomie und Histologie Bd. 8, 1926. — 6) **Ehrhardt**, Zur Anatomie und Klinik der Struma maligna. Bruns Beitr. zur klin. Chir. Bd. 36, S. 343, 1903. — 7) **Eppinger**, zit. nach Kaufmann (17). — 8) **Goldzieher**, zit. nach Dietrich u. Siegmund (5). — 9) **Graham**, Malignant tumors of the thyroid. Surg. gynec. obst. vol. 37, p. 781, 1924. — 10) **Herring**, zit. nach Dietrich u. Siegmund (5). — 11) **Hunt**, Pathological study of a case of myxoedema associated with tuberculosis of the adrenals. Americ. journ. of the med. scienc. vol. 129, p. 243, 1905. — 12) **犬塚**, 悪性甲状腺腫ニ就テ. 内分泌及實驗治療 第3巻, 659頁, 昭和10年. — 13) **石本**, 癌腫症ニ於ケル内分泌腺ノ病理解剖學的及組織學的研究其ノ2, 腦下垂體ノ變化ニ就キテ. 十全會雜誌 第40巻, 3550頁, 昭和10年. — 14) 同人, 同, 其ノ3, 副腎ノ變化ニ就キテ. 十全會雜誌 第41巻, 738頁, 昭和11年. — 15) **神田**, 悪性甲状腺腫ニ就テ. 日本外科學會雜誌 第32回, 361頁, 昭和6年. — 16) **Kartagener**, Ueber einen Fall von Cancroid der Schilddrüse mit peritheliomartigen Bildern. Zieglers Beitr. Bd. 79, S. 843, 1928. — 17) **Kaufmann**, Die Struma maligna. Deutsch. Zeitschr. f. Chir. Bd. 11, S. 401, 1879. — 18) Derselbe, Sechs weitere Fälle von Struma maligna. Deutsch. Zeitschr. f. Chir. Bd. 14, S. 25, 1881. — 19) Derselbe, Spezielle pathologische Anatomie Bd. 1, 1931. — 20) **Kocher A.**, Kropf. Kraus u. Brugsch, Spezielle Pathologie und Therapie innerer Krankheiten Bd. 1, 1919. — 21) **Kocher Th.**, Zur klinischen Beurteilung der bösartigen Geschwülste der Schilddrüse. Deutsch. Zeitschr. f. Chir. Bd. 91, S. 197, 1908. — 22) **Kon**, Hypophysenstudien. Zieglers Beitr. Bd. 44, S. 233, 1908. — 23) **Kraus**, Zur Pathologie der basophilen Zellen der Hypophyse. Virchows Arch. Bd. 247, S. 421, 1923. — 24) Derselbe, Die Hypophyse. Henke u. Lubarsch, Handbuch der speziellen pathologischen Anatomie und Histologie Bd. 8, 1926. — 25) **Krompecher**, Zur vergleichenden Histologie der malignen epithelialen Schilddrüsengeschwülste. Zieglers Beitr. Bd. 73, S. 386, 1925. — 26) **Langhans**, Ueber die epithelialen Formen der malignen Struma. Virchows Arch. Bd. 189, S. 69, 1907. — 27) **Lücke**, Cancroid der Schilddrüse mit sehr acutem Verlauf. Arch. f. klin. Chir. Bd. 8, S. 88, 1867. — 28) **中村**, 甲状腺癌腫. 日本外科學會雜誌 第34回, 2165頁, 昭和9年. — 29) **中谷**, 白血病例ニ於ケル甲状腺ノ變化. 十全會雜誌 第41巻, 1630頁, 昭和11年. — 30) **中山**, 本邦ニ於ケル甲状腺腫ニ就テ. 東京醫學會雜誌 第41巻, 1頁, 昭和2年. — 31) **野谷**, 甲状腺肉腫及其癌腫トノ合併腫瘍ニ就テ. 日本外科學會雜誌 第14回, 845頁, 大正3年. — 32) **Pettavel**, Beitrag zur pathologischen Anatomie des Morbus Basedowii. Deutsch. Zeitschr. f. Chir. Bd. 116, S. 488, 1912. — 33) **塚, 乃木**, 甲状腺カンクロイド?. 北越醫學會雜誌 第49年, 1558頁, 昭和9

中谷論文附圖

第 1 圖



第 2 圖



年. — 34) 塚, 甲狀腺カンクroid. 北越醫學會雜誌 第50年, 1271頁, 昭和10年. — 35) Schmidtman, Zur Kenntnis seltener Krebsformen. Virchows Arch. Bd. 226, S. 100, 1919. — 36) Wegelin, Schilddrüse. Henke u. Lubarsch, Handbuch der speziellen pathologischen Anatomie und Histologie Bd. 8, 1926. — 37) Zuckermann, Ueber einen Hypophysenbefund bei Schilddrüsenaplasie. Frankf. Zeitschr. f. Pathol. Bd. 14, S. 143, 1913.

附 圖 說 明

第1圖 甲狀腺右葉中央部.

A 小濾胞性ノ實質性甲狀腺腫ノ像ヲ呈スル部.

B 増加セル結締織.

L 淋巴細胞ノ集積竈.

(「ヘマトキシリン」—「エオジン」染色標本, 40倍廓大).

第2圖 甲狀腺右葉後下部ノ隆起セル部.

A 腺癌ノ像ヲ呈スル部.

P 癌眞珠.

B 多數ノ「プラズマ細胞ヲ含ム細胞浸潤.

(「ヘマトキシリン」—「エオジン」染色標本, 50倍廓大).